

日本体操学会 会報 vol.14

2017.12 発行

ごあいさつ



日本体操学会会長
金子嘉徳（女子栄養大学）

皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

平成 29（2017）年 9 月 2 日（土）・3 日（日）の両日に、日本体操学会第 17 回大会が、東海大学湘南キャンパスを会場として、大塚隆大会組織委員長（東海大学教授）をはじめ大会組織委員の方々のご尽力により開催され、「動くを学ぶ、動きを学ぶ」をテーマに、参加して下さった多くの学会員の方々と学びを共有することができました。

今回、ポスター実践報告部門の創設により、さらに多くの会員の皆様の日々の実践活動の様子を共有することができました。これら共有が、皆様の次の研究のヒントや、今後の実践指導の一助となりますことを期待しております。本会報には、それらの報告内容もまとめておりますので、ご出席いただけなかった方にはご一読していただきたいと思っております。また、ご出席いただいた皆様にも、今一度思い出していただき、体操の幅をさらに広げる機会としていただければ幸いです。

第 17 回大会概要

- テーマ：「動くを学ぶ 動きを学ぶ」
- 期間 平成 29（2017）年 9 月 2 日（土）・3 日（日）
- 会場 東海大学湘南キャンパス 17 号館、武道館
- 参加者：第 1 日目 109 名、第 2 日目 56 名
- 主催：日本体操学会
- 後援：東海大学、日本学術会議、（公財）日本体操協会
- 協力：秦野市こども健康部健康づくり課

学会プログラム（日本体操学会 HP 参照）

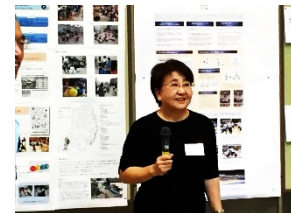
<http://taisou.jp/wp-content/uploads/2017/08/17th-Proceedings-small.pdf>



開会式・オープニングイベント

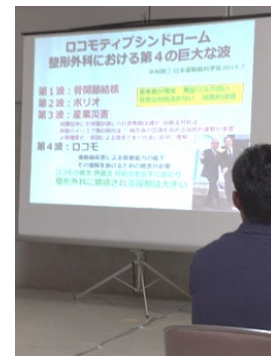
金子嘉徳会長の開会挨拶では、東海大学の創立者である松前重義氏とデンマークとのつながりが紹介された。デンマークの教育による国づくりの歴史に啓発され、生涯を教育に捧げようと決意し塾を開設したことや、デンマークの体操家である Niels Bukh にも影響を受けていたのではないかとご紹介があった。

オープニングは川向妙子氏（東海大学名誉教授／はだのさわやか体操考案者）の指導で、バリエーション豊かな15種類の動き（市民体操「はだのさわやか体操」）をご紹介いただいた。リズムカルな全身運動を市民体操普及ボランティア「さわやかマスター」の皆さん22人と一緒に参加者全員で気持ちよく動いた。



基調講演

基調講演は整形外科医の佐々木信之氏によって、2007年に日本整形外科学会から提唱されたロコモティブシンドローム（運動器症候群）や現代の健康問題など、最新データを用いた興味深い内容をご講演いただいた。また、後半は鈴木玲子氏（東北福祉大学）のご指導でロコモ予防体操「ロコモかしこもサビないで」を参加者とともに実践した。この歌や体操は東日本大震災の後、生活環境の激変により運動機能の低下から要介護に至るリスクが高い被災者に接して運動（体操）の必要性を痛感され、自ら監修されたものであった。動きながらロコモチェックができる楽しい体操に、会場は大いに盛り上がった。



口頭発表

今回は1題の研究が発表された。「ジュニア期を指導する女性コーチが捉える『コーチの学び』に関する研究-新体操女性コーチを例として-」をテーマに、2名の指導者に焦点が当てられた質的研究内容の発表であった。指導者の抱える課題は、新体操のみならず、すべての体操指導者に共通する点もあり、講習会参加や指導者同士の情報交換の重要性が示された。



ポスター研究発表、実践報告

研究発表 11 題、実践報告 28 題があった。前半は、奇数番号の演題について 1 分間のインパクトプレゼンテーションを行い、その後約 30 分に渡って各ポスターの前で個別のディスカッションをおこなった。後半は偶数演題について同様に実施した。初日はネクサスホールに掲示し、2 日目は剣道場に場所を移して張り出し、ポスター閲覧できる時間が多く設けられた。

今回、実践報告という形式で、発表に慣れていない方も発表していただける形を取った結果、28 題と多くの発表があった。体操を楽しみ、活動を広めるために様々な取り組みが行われていることがわかり、多くの情報を共有することができた。

これをきっかけに研究発表が増えることを願いたい。



公募研究プロジェクト発表

今回の公募研究プロジェクト発表は、1 日目（伊藤氏、三浦氏ら）と 2 日目（檜皮氏、鈴木邦明氏）の両日に渡って実施された。

伊藤氏の研究は、健康体操の効果と学校体育における体操の意義について、中高年健康体操実施者への質問紙および体力テスト、学校教員への質問紙調査の結果より多角的に明らかにした研究であった。

三浦氏らの研究は、戦後二代目ラジオ体操の解説書作成というテーマで、平成 27 年度公募研究プロジェクトの内容を発展させ、戦後二代目ラジオ体操について、実施者の目線に立った分かりやすい解説書の作成に成功したものであった。

檜皮氏の研究は、子どもの投動作の向上を目的とした体づくり運動の教材試案についての研究であり、個々の事例を丁寧に観



ることの大切さを改めて認識させられる発表であった。鈴木邦明氏は、体育授

業における鬼ごっこの身体活動量について、児童を対象に 3 軸加速度計による計測を行い、鬼ごっこを体育授業へ活用するための基礎的資料を提示した研究であった。

いずれも、研究テーマに対する熱意をひしひしと感じる発表であった。質疑応答の一つにも挙げられたように、得られた知見をどのように現場に還元するか、の具体策を、学会参加者を含め一人一人が考えていくことが重要であると感じた。



ワークショップ「動きを学ぶ～障害者スポーツの観点から～」

内田匡輔 先生（東海大学体育学部体育学科）

ワークショップの最初にリオパラリンピックの動画紹介が行われ、他にも「デフリンピック（聴覚障害のオリンピック）」「スペシャルオリンピクス（知的障害）」などが開催されているとの紹介があった。

実技の導入として、2 人組になって声を出さないで行う「声なしジャンケン」や背中合わせで声のみで行うジャンケン、目を瞑った人の周りを一周回りどちら回りかを当てるゲーム、3 人が目を瞑った人の周りを囲み、どの順番で手を叩いたのかを当てる等の感覚ゲームを行った。

その後は実際にパラリンピック等で行われる競技の体験を行った。最初は「コールボール」という、目隠しをして鈴の入ったボールを投げ合うゲームを行った。視覚に頼らず聴覚を頼りにボールの位置を把握しなければならなかったため、ボールをとれなかったり、場所が分からなくなったり等、苦戦しながらも参加者は楽しんでゲームに参加していた。

次に、片足を失った競技者が行う「アンプティーサッカー」を体験した。



片足の足首とふとももをベルトでしばり、杖を使って片足のみで行うサッカーで、杖を使って走ったり、杖で支えながらボールを蹴る必要があるため、うまくボールを扱えなかったり転倒してしまう参加者もいた。

他にも、視覚障害者と健常者が一緒に行う「フロアバレーボール」の動画紹介、車いすテニスや車いすバスケットボールで実際に使用されている車いすの紹介等があった。

ゲームなどの実技が中心のため、笑顔で参加出来るととても楽しいワークショップだったが、改めて障害があることの大変さ、当たり前にある目や耳・足の大切さを実感でき、とても深く考えさせられるワークショップとなった。

分科会・分科会報告

「キッズ分科会」「学校体育分科会」「中・高齢者分科会」の3つがそれぞれ柔道場、剣道場に分かれ、検討会を行った。参加者は自分が希望する分科会に参加し、提案された運動を体験するとともに、各分科会でテーマ設定されている内容についての討論会において活発に意見交換を行った。

<キッズ分科会>

今回は運動を行う際の子どもの「主体性」「対話」といったキーワードを踏まえ、「子どもの世界観（イメージ）を大事にした体操」をテーマに、しかのてつや氏が創作したオリジナルソング「カレーライス」「たべものたっぷりたいそう」「いきものへんしんたいそう」に合わせて子どもや実施者が動きを自由にアレンジできる体操の提案と、分科会メンバーのフィールドで実践した報告を行った。その後、参加者と一緒に動きながら対象別の展開例、バルーンなどの用具を取り入れた発展例などの紹介や意見交換があった。次に鈴木玲子氏による「金太郎体操」の体験を行った。参加者はたべものやいきものをイメージしたオリジナリティのあるユニークな動きを考えたり、金太郎の掛け声をかけながら大きく動いたり終始笑顔あふれる分科会となった。



<学校体育分科会>

学校体育分科会では「走る」をテーマとした実技の提案として、中学1・2年生を対象とした体づくり運動領域「体の動きを高める運動」の中から「動



きを持続する能力を高めるための運動」をねらいとした効率の良い組み合わせについてのプログラム提案があった。

フロアに直線や円形のコースを設定し、カウントに合わせて走る運動を行ったり、ステップ走にアレンジしたりといった学習を通して、自己の動きを調整する力、自分が考えた動きを仲間に伝える力、相手の動きや体力に応じた走り方などができる力を育むことを目標として実践された。ペアやグループで呼吸を合わせながら軽快に動く姿がみられ、楽しそうにプログラムに参加している様子が印象的であった。



<中・高齢者分科会>

高齢者分科会では、分科会メンバーによる体操指導実施状況を資料として提示し現状を把握するとともに、吉中氏、金子氏、春山氏、砂田氏による実技も含めた実践報告があった。討論会では中・高齢者指導上の課題抽出と解決方法の共有や体操の創案・共有・普及・評価の検討、他専門領域との連携などがテーマとして挙げられた。参加者は、ペアやグループでの音楽体操では楽しく体を動かし、実践報告では、超高齢社会の背景を踏まえながら、現場における中・高年者の教室参加者の実態と指導上の課題について熱心に耳を傾けていた。



最後に、各分科会リーダー藤巻氏、大塚氏、金子氏より検討会の実施内容、意見交換内容についての報告があった。

全体を通して、今後の予定としては各分科会においてメーリングリストを活用し、教室、イベント案内、意見交換等の情報共有をはかっていくことが伝えられた。また分科会で創案されたプログラムはできる範囲で映像化し、HPにアップロードし発信していくことを希望するとの意見があった。最後に分科会世話人金子氏より、今後各世代の体操を充実させることと併せて、多世代交流も含めた体操の可能性についても探っていけるとよいのではないかと提案があり、それぞれの現場でより多様なニーズに沿った実践的な活動を推進していくことの重要性について話がまとめられ、分科会報告が締めくくられた。

情報交換会

学会第1日目の夜に行われた情報交換会には、基調講演・実技をしてくださった佐々木先生と鈴木先生もご参加くださり、大変賑やかな会となった。研究発表を終えてホッとした表情で喉を潤している人たちの姿も大変印象的だった。美味しい食事をいただきながら、それぞれ持ち寄った情報を交換し、交流をより深められた有意義な時間となった。



【次回学会大会のお知らせ】

日本体操学会第18回大会

日程：平成30（2018）年9月14日（金）・15日（土）

会場：女子栄養大学坂戸キャンパス

執筆担当 吉中康子 砂田真弓 檜皮貴子 鹿野哲也 古屋朝映子 鞠子佳香

編集 日本体操学会広報委員会